

## 【論 文】

# „Stiller“ 「4番目の殺人」 について

村 上 文 彦

## 要 旨

長編小説 „Stiller“（邦訳：『ぼくはシュティラーではない』）は、スイス人作家Max Frischが43歳の時に執筆した彼の最初の長編小説である。以下に記す通り、筆者はこれまでこの作品の成立に至る過程を実証的に研究し、その成果を「総合文化研究」に継続的に発表してきた。そして前回はその作品そのものに焦点を当てて全体的に考察した論文を発表した。さらに今回、本稿においては作中の「4番目の殺人」と言われる挿話を中心に考察した。特にその体験を経て主人公Stillerの内面が劇的な変化に至る点を解明することを試みた。

## はじめに

Frischが1954年にこの作品を完成させてからすでに60余年が経過しているが、示唆に富んだこの作品から今なお学ぶべきことは多い。この作品はSuhrkamp出版社の最初のベストセラーとなり、翌1955年に作者Frischは当時まだ西ドイツのブラウンシュバイク市からWilhelm-Raabe賞を授与されたのである。

筆者はこれまでFrischのこの作品に関して「„Stiller“ 生成への過程」〔『総合文化研究』第16巻第1号2010年6月、日本大学商学研究会発行〕、「„Stiller“ 生成への過程：もう一つの成立史」〔『総合文化研究』第17巻第1号2011年6月、同上〕、「„Stiller“ の成立」〔『総合文化研究』第18巻第1号2012年8月、同上〕、さらにこれから派生した論文「„Max FrischとPeter Suhrkamp“」〔『総合文化研究』第19巻第1・2号合併号2013年12月、同上〕、そして作品全体を論考した「„Stiller“ 考察」〔『総合文化研究』第23巻第2号2017年12月、同上〕、などを継続して発表してきた。

本論においては、この作品の中で中心的役割を果たしている挿話、つまり「4番目の殺人」とされているアメリカ合衆国ニューメキシコ州カールズバットの洞穴での二人のJimの物語に焦点を当てて、さまざまな角度から分析した。この挿話はそのかなりの部分を実在したカウボーイJames Larkin Whiteの物語を借用し、そこに伝統的なドッベルゲンガーの技法を絡ませてFrisch独自の物語を構成している。それらの点をより深く掘り下げ、この

挿話の重要性を検証し、作品のより深い解釈を試みるものである。

## 1 StillerとWhite

この小説の主人公Stillerは6年前に失踪したが、Whiteという偽名を使い故郷のチューリヒに戻ってくる。彼は一貫してStillerと同一人物であることを認めようとしないのである。スパイ事件との関連を疑われ拘束された彼は身の潔白を証明するため獄中でノートに手記を綴り、そのノートで小説は展開していく。そしてその中心となるのがStillerの獄中での手記である。彼は裁判による法律的な本人確認が済むまで未決囚として収監される。彼が見間違われたと主張するStillerとは、チューリヒ生まれの彫刻家Anatol Ludwig Stillerであり、夫人である舞踏家のJulika Stiller-Tschudyと結婚、6年前から失踪中であり、最終居住地はチューリヒ市シュタインガルテン通り11番地であるとされる。<sup>1)</sup>

StillerはWhiteという偽名で、偽のパスポートを使って、自分で選んだアメリカでの亡命生活から密かにスイスへ帰還したのである。彼はあらゆる手段で自分がStillerとみなされることを阻止しようとし、自分は全く別人のアメリカ人Whiteであると言い張る。しかし彼は見抜かれ、その身を拘束され逮捕されたのである。Stillerは6年前に姿を消す少し前にソビエトのスパイ、スミルノフと会っていたために彼にはスパイの嫌疑がかかっていたからである。後になって、その疑わしい日に彼にはアリバイがあることが明らかになる。しかしこのスパイ嫌疑は、Stillerが収監されるための表面的な理由として用いられているにすぎず、この小説の中では単なる下位の役割しか果たしていないのである。つまり、スパイ嫌疑についてはそれ以上の進展はまったくない。

„Ich bin nicht Stiller“<sup>2)</sup> (「ぼくはStillerではない」)と主張する主人公の言葉で始まっているこの小説には様々な挿話が含まれているが、Stillerと思しき主人公は„White, James Larkins, New Mexico, USA“と名乗るのである。<sup>3)</sup> 彼が所持していたアメリカのパスポートにはやはりJames Larkin Whiteと記してあるのである。しかしそのパスポートは後に偽物であることが判明するのである。つまり彼はWhiteという人間ではなかったのである。

主人公Stillerが詐称するこの名前はどこに由来しているのだろうか。実はその名前は作者Frischが自由に作り出した名前ではない。James Larkin White、この名前は、アメリカ合衆国のニューメキシコ州でカールズバッド洞窟を探検した、実在のカウボーイに由来している。このカウボーイの名前をStillerは借用し、詐称しているのである。このことから、この小説全体の中でカウボーイの挿話、つまりカールズバッド洞窟での挿話が重要な位置を占めていることが推察されるのである。

失踪したStillerはスイスへ帰還するが、そこには帰還させる何事かが、彼の心を変化させる何らかの出来事がなければならなかったのである。単に逃亡して6年後に偽名で帰郷するだけではこの小説を通してFrischが読者に何を提示しようとしたのかが不明であろう。

いったん逃亡した人間が帰還するという行動に至るにはそれなりの納得させるべき根拠、つまり心的変化が不可欠だったのである。そしてその変化をなさしめた出来事がカールズバッド洞窟での出来事であり、その話は「4番目の殺人」として看守Knobelに語って聞

かせた物語なのである。その体験がStillerに心理の変換をなさしめたのである。それゆえにStillerは自分をJames Larkin White と名乗り帰還するのである。そこで「4番目の殺人」の意義が正しく解釈されるべきなのである。

Volker Hageは次のように述べている。

「ぼくはStillerではない！、とこの小説の冒頭の文はなっているが、それは真実であり、同時にまた嘘でもある。小説の中で仕上げられているあらゆる事実を総括すると、次のことが明らかになるのである。つまり、Ich形式の物語手は失踪したAnatol Ludwig Stillerなのである。しかし、次のこともまた明らかになるのである。つまり、彼は、周囲が彼をそうだと見なしているその男ではない、あるいはその男であろうとしないのである。それゆえに彼は、二番目の人生をコートのように羽織り、他の人物になりすまし、汗と空想力を張り付けた覆いの中に逃亡するのである。そのことによって彼は少なくとも作家としての仕事を行うのである。つまり彼は、自分自身をより容易く隠すことができるように物語をでっち上げるのである。」<sup>4)</sup>

このようにHageが簡潔にまとめている通り、刻まれた像を押し付けられるのを嫌い、Stillerは逃避する。そもそも一人の人間に一定の枠組みを押し付けてしまうことは、旧約聖書の中でも厳しく戒められている人間の犯す深い罪の一つなのである。Frischは次のように記している。

「身近な人に、あるいはそもそも一人の人間に一つの固定した像を創り、お前はこういう人間だ、それだけだ！というのとは非愛の印であり、したがって罪である・・・」<sup>5)</sup>

他者に対し一つの像を押し付けることは同時にその人から他の可能性を奪うことも意味している。Stillerは一つの像を押し付けられてしまったのだと自己解釈し、その像以外のあらゆる可能性を奪われてしまったと感じたのである。被害者としての自分に耐えきれなくなったのが失踪の大きな要因の一つである。それまでとは違う別な人間になればその押し付けられた像から逃れることができる、それゆえに彼はかたくななまでに自分がStillerであることを否定し、Whiteであると主張し続けるのである。しかし、Stillerだけがその刻んだ像の被害者なのか、自分が妻のJulikaに対して類似した罪を犯していることなど自覚することはなかったのである。彼自身も妻のJulikaに対して同じように刻んだ像を創り上げてしまっていたのではないかと、という自己反省は欠落している。つまり、この罪は誰でもが犯しうるのである。誰でもがその加害者にも被害者にもなりうるのである。そして人間の弱さ、そしてそれを克服する強さがこの小説の根底には描かれているのである。

Whiteは次のように述べている。

「僕は彼らの思っているStillerではない。彼らは僕をどうしようとしているのか！僕は何の裏もない、全くない、一人の不幸な、取るに足らない、つまらない人間だ。なぜ法螺を吹くかだって？ 彼らが僕に虚しさを、つまらなさを、現実を委ねてくれるようにするためだけだ。なぜなら逃亡はありえないからだ、そして彼らが僕に与えようとしているものは自由ではなく、逃亡なのだ、一つの役割の中への逃亡なのだ。なぜ彼らは僕を手放してはくれないのか？」<sup>6)</sup>

押し付けられる役割と、本来の自分でありたいと思う心との激しい相克、そこが問題なの

である。押し付けられる役割が自分の望む役割と同じという可能性は低い。意に添わなくともかつては受け入れざるを得なかった押し付けられた像、その像には二度と戻らないという強い意志、それが彼に自己否定させるのである。

Whiteはこの看守Knobelに4つの殺人の話を物語るが、そもそも殺人などということは現代の法治国家スイスにおいては極めて異常な事柄であり、常識の範囲を超越した非日常的な範疇に属することである。Whiteが語る野性的で、奔放で、型破りな行動はスイス人の感性を超えたものであろう。したがってKnobelの反応は主として驚き、感心、感動などの領域のものなのである。Whiteは自分の身を隠すためにそれらの話を物語ったと理解するよりも、それらの体験を経たならば当然人間も変わるのだということを伝えたかったと解釈するべきであろう。つまり、逃亡して、さまざまな体験を経たならば以前の自分とは異なる人間になったはずだ、それならば別人として別な名前で故郷に立ち帰っても何もおかしいことはない、というのがStillerの思いであると解釈できるのである。

WhiteがKnobelに語ったその殺人とはどのようなものか。殺人とはつまり一人の人間を殺すことであり、それは生物学的に死亡させることばかりではない。つまり殺人のいわば形態についてFrischはWhiteに次のように語らせている。

「一人の人間を、あるいは少なくともその魂を殺すにはいろいろな方法があるんだ。しかもそれは世界中のどんな警察も気がつかない。それにはたった一言で充分なんだ。適切な瞬間に言う正直な一言でこと足りる。微笑みで、あるいは沈黙で殺されない人間がいたら、会ってみたいものだ。このような殺人は、もち論だが、非常にゆっくり行われるものだ……」<sup>7)</sup>

生物学的に生命を奪うことだけが殺人ではなく、その人の精神、あるいは他の表現をすれば、その人の心を殺してしまうことも明らかに殺人なのである。生きようとする気持ちを奪ってしまうこと、それも殺人である。そしてその形態は無限にありうるのである。

Whiteが犯したと主張する殺人とは4つである。1番目の殺人は妻殺しであり<sup>8)</sup>、2番目の殺人はギャングの親分Schmitzを左のブーツに入れておいたインディアンの短剣で刺殺したという話であり<sup>9)</sup>、3番目の殺人は混血女性Florenceの夫Joeを撃ち殺した話であり<sup>10)</sup>、そして「4番目の殺人」がカールズバッドの洞穴での同僚カウボーイJimを格闘の末に奈落の底に沈めて殺した話である。<sup>11)</sup>

これらの4つの殺人の信憑性は疑わしいが、このうちでStillerにとって最も重要だと思われるのが「4番目の殺人」である。そしてStillerはその体験の後、自分をWhiteと名乗りだすのである。つまり、Whiteとは、「4番目の殺人」の話の最後で明かされる名前なのであり、1901年に一人のメキシカン・キッドを伴って最初のカールズバッド洞窟探検を行ったと言われるJames Larkin (Jim) Whiteという実在したカウボーイの名前なのである。

さらに付け加えるならば、実はこれらの4つの殺人の他にもう一つ殺人を犯そうとしたことも書きとめてあるのである。上記の4つは他者に対しての殺人であったが、もう一つは他ならない自分を殺害しようと試みたことである。2年前のある日、彼は自殺しようと試みたのである。小さな古い銃器で自殺を図ったとき、意図したよりも早くに弾が発射され右耳の上をかすめただけでこの試みは不成功に終わったのである。<sup>12)</sup> そして半覚醒状態

の中で、突然何もできなくなる、前にも行けず後ろにも行けず、倒れることもできず、上にも下にも、それどころか終わることもなく死もなく、絶望的に生きていることが恐ろしいほどに苦痛だと感じるのである。<sup>13)</sup> だが、自分の頭の中に弾丸を撃ち込んでも、それでは何も片付かない。殺した後は行き返らせることもできない。不首尾に終わった自殺の試みの後、生きている限り人生を歩み続けなければならないという当然のことをStillerは今更ながらに感じるのである。妻のJulikaがサナトリウムの隣人で、親しく接してきていたベテランの突然の死で愕然とした思いを抱いたように、一人が命を落とし、この世から去って行ったとしても、世の中の動きは何も変わらない。人々はひっそりと、そして整然と、粛々と日々の活動に従事するのである。7番目のノートの中で、Whiteはメキシコのハニツィオで見かけた死者の日の光景を思い浮かべるのである。インディオの母たちは祭りのように着飾って、結婚式のためのように髪を梳いて、一晚中墓の上にうづくまっている。たった一つの墓石もなければそもそも何の印もない墓地、だが死者たちがどこに眠り、そして彼ら自身がいつの日かどこに眠ることになるのかを村の誰もが知っている。一晚中ローソクを灯し、寒い夜をじっと地面に座り込んで死者の霊を弔う。朝が白むまで、何も起こらず、静かな忍の夜を過ごすのである。<sup>14)</sup>

このハニツィオの短い描写は人生のはかなさ、悲しさを伝えて余りある。弔いの儀式の形や規模は様々だ。だが一人の人間がこの世を去った悲しさは言葉にできるものでもない。時の経つまま黙して墓でうづくまる母親たちに慰めの言葉は無用であろう。自分たちに与えられた人生の意味を彼女たちは理解しているに相違ない。そしていつか自分たちの誰もがこの世を去らなければならない運命を背負っていることも知っている。この誰もがいつかは迎えなければならない死、避けて通れぬ死、その日は必ず訪れるのである。あるのは来るべき日までの与えられた時間である。その時間をどのように過ごすべきなのか、押し付けられた像のままでもいいのか、Stillerは改めて自己の問いかけの正当性を見た思いがしたのであろう。

## 2 逃亡からの帰還と自己否定

様々な問題を内包するこの小説の中で最も重要と思われる点は、なぜStillerは失踪したのか、そしてなぜ6年後にスイスへ戻ってきたのか、さらになぜ頑なに自己否定をし続けるのか、という点に集約される。

そもそもStillerはなぜ逃亡したのか？ 彼は自分のそれまでの人生を失敗したものと見なしており、Stillerとしての役割をもはやこれ以上演じようとは思わなくなったからである。結婚生活や、友人たちや、そして故郷など、まさにこの不一致から彼は自分を解放し、あらゆるものから突然逃げ出し、アメリカへと逃亡したのである。しかしそこでも彼は真の自分をなかなか見出すことはできなかった。それどころか自殺を試みさえしたのである。この長編小説にはStiller逃亡の理由がちりばめられている。それらの理由を拾い集めてみると、まず1番目のノートの中で「僕の不安、繰り返しだ！」と記されている。<sup>15)</sup> 日々の生活に流され、逃亡のない繰り返しを自分の人生としてしまうことへの恐怖。それらの

行動や意識などのすべてが、どこへ行くのかという希望のない逃亡を引き起こすのである。しかしまた1番目のノートの中で「逃亡はあり得ない。僕は知っているし、毎日自分にそう言い聞かせている。殺人を犯さぬために僕は逃亡した。そして逃亡するという試みこそが殺人だということを知った」とも書き記し、揺れ動く気持ちを吐露してもいる。<sup>16)</sup>そして5番目のノートでは「我々の人生における失敗が葬られることはない、そして僕がそれを葬ろうと試みている限りその失敗から抜け出すことはできない、逃亡はあり得ない、と今日もまた明確に認識する」とも記しているのである。<sup>17)</sup>人生の失敗も、あるいは失敗した人生も、逃亡するだけでは何の問題の解決にもならない。精神的に何らかの問題を意識したならば、逃亡ではなく、いつかはその問題と正面から対峙しなければならないのである。そしてその問題を乗り越えてこそ、真の自分に到達する道が初めて開けてくるのである。

逃亡と自己探求は同じではない。単なる現実からの逃避はまさに逃亡である。だが自分を知るための試みは自分自身に至るための欠かせない道程である。様々な体験をして過去の自分とは異なる人間になったようでも、それは過去の自分の延長にある自分である。逃亡はあり得ないのであり、自分から逃れたいという希望ほど無意味なものはないのである。

それまでの自分、それまでの過去を忌避し、もはや耐えられない状態に陥ったときそこから逃れて、アメリカへと逃亡したのがStillerである。逃亡するということは現実には負けた諦めの行為であり、逃げであると同時に、Stillerの場合はそれまでの自分とは違う自分になれるという自分自身に対する期待でもあった。どうすれば違う人間になれるのか、それはそれまでとは異なる環境で異種の体験を積み重ねることなのである。そしてその体験を積み上げた後に自分は過去の自分とは異なる人間となり、過去の場所に立ち帰る権利を手にすることができる、ということで都合のよい詭弁である。

それまでの生活を、あるいはそれまでの自分自身を嫌悪してアメリカへと逃亡したStillerがなぜ6年後スイスに舞い戻ってこなければならなかったのか、なぜチューリヒへの帰郷なのか、その理由、あるいはその根拠を尋ねられるならば、ただ単にほとぼりが冷めたからではない。そもそも過去を嫌悪するならば、二度と戻らないという選択肢もあったはずである。それでもなお戻った訳は、カールズバッドの洞窟での体験で、相反する二つの心に決着をつけたからに他ならない。ではなぜ、舞い戻ってStillerではないと昔の自分を拒否するのか、それは異文化を体験し、精神的に発展を遂げ、別な人間に成長したとと思っているからである。変身を遂げたと自負するStillerはもはや過去のStillerとは別人として、アメリカ人のJim Whiteとしてスイスに戻るのである。それぞれにはこのたった一つの人生しか与えられていない。あるいはそもそも他のものをもつことなどできない、それゆえに自分の人生から逃げ去ることはできない、という経験に強いられて、6年後に帰ってくるのである。そしてその心理的変化の過程が7冊のノートに書き綴られているのである。ただしその記述は必ずしも秩序立ってはならず、ある時は遠い過去の思い出であり、またある時はアメリカやメキシコでの体験であり、また様々な挿話などであり、同時にスイス観察、スイス批判なども含まれている。

この物語は他人を装うStillerとかつての彼をよく知る人物たちとの対面が作品理解の上

で大きな比重を占めることになるのである。彼を知る人たちは一様に昔の彼をそこに求める。それに対してStillerは昔とは違う自分を示そうとあがくのである。それゆえに彼は自分がStillerであることをかたくなに拒否し、彼の弁護士も、彼の妻Julikaも、彼が同一人物であることを認めるように勧めるが、彼の心を動かすことはできないのである。

### 3 看守Knobel

ここで、上述の看守Knobelについて触れておくべきであろう。監獄で拘束されたStillerの世話をする純朴なKnobelは、かつてのStillerを知らない人物として登場しているのである。以前のStillerを知らず、現在のWhiteしか知らないために、彼はこのStillerと現在のStillerを比較することはできない。したがって彼はStillerの精神的変化には全くかわりがなく、現在のWhiteだけを唯一信じるのである。

そもそもStillerは内向的で些事に拘泥し、健康的な豪快さに欠ける、陰湿な、こせこせした男として描かれている。その男が自己改革を経て新たな自分になったということは、性格も、行動も以前とは異なる人物像が必要となるのである。それゆえにStiller、自称Whiteはかつての自分とは真逆な、行動的で、大胆で、荒々しい男として、異国で体験したという物語をKnobelに語って聞かせるのである。看守Knobelは組織に属する人間であり、スイスという国で日々生活している小市民の一人である。Stillerは逃走する以前の、かつての自分をKnobelに感じているのであろう。遠くへの憧れを抱きつつも平穏な同じ毎日を送るKnobelは非日常的で非スイス的なWhiteの話を好んで聞きたがるのである。隅々まで管理が行き届き、厳然とした秩序が存在するスイスでは考えられないような対極の世界、西部の荒々しい野性の生活、現実とはかけ離れた夢物語が次々と語られる。到底人を殺めたりなどしそうな男が語るのは非現実の世界、それがKnobelに聞かせる話の共通点である。

ロックフェラー財団からの奨学金を得て、アメリカに滞在していた間、Frischはどのように活用できるかを意識せずに原稿を書き溜め、その量は600ページに及んだ。そもそも小説を書きたいと思っていたが、作品をものにするにはできなかった。どのように扱えばよいかわからなかったそれらの原稿は„Stiller“という小説の中で解き放たれ、小説の中にちりばめられ、それぞれの役割を効果的に果たしているのである。バラバラな原稿は、Stillerという小説のストーリーの中で、一つ一つがそれなりの存在意義を持ち、一本の線で貫き通されることになったのである。Stillerの中に収められたアメリカでの挿話はそのどれもが、その素材においても、表現力においても自由でのびのびとしており、Frischの才能をいかんなく発揮させている。スイスにいた時に縛られていた伝統や道徳や倫理観から解き放たれ、制限したり、抑圧したりするものがない、奔放で、開放的で、常識や規範にとらわれず、思うままに描かれている。そしてそれらが異国での出来事でなければ、スイスを逃亡する意味がなくなってしまうのである。スイスでできる体験だけならばStillerのアメリカへの国外逃亡の必然性は消滅する。スイスと対極に位置するアメリカでの体験であるからこそ説得力を持つのである。スイスでは決して体験できないような話、その話

が豪快で、大胆で、スイスの感覚から離れていればいるほど魅力的で、異国的で、非スイス的となる。Knobelが心服すればするほど、異文化体験を積み重ね、精神的にかつてとは異なる人間に再生したというStillerの思いが強くなり、確信になっていくのである。したがって物語の話に異文化体験という共通の基礎さえあれば、個々の話の関連性は不必要であり、バラバラなままでその役割を十分に果たしているのである。

Stillerは食事の世話をする看守Knobelに自分が体験した、あるいは体験したと思われる話を物語るが、Stillerの前歴を全く知らないこの看守はその一つ一つの話に耳を傾ける。そこでこの看守は従順な男であり、Whiteの話に疑問は差し挟んでも、否定はしない男なのであり、物語の進展を促進する役割を担っている。つまり、この看守はWhiteの素性を全く知らないという意味でこの小説を読む読者と同じ立場にいるのである。したがってKnobelには一方的な聞き役という役割を与えられているにすぎない。そもそもこの看守の名前であるKnobelとは『さいころ』を意味し、自分の意思で行動するのではなく、語り手次第でどうにでも転がることを意味している。したがって、この看守はStillerの言葉に疑問を感じることなく、Stillerが語ることをそのまま信じる唯一の人間である。<sup>18)</sup>そしてWhiteが看守に語り聞かせるときは、作者Frischが読者に語り聞かせているときなのである。つまり、看守Knobelはまさに読者の代表の立場にいるのである。したがって主人公の話に耳を傾けるKnobelの反応は、作者Frischが想定した、平均的な読者の反応だと解釈すべきであろう。KnobelはWhiteの物語の潤滑油の役割を果たしているのである。

#### 4 カールズバッド洞窟

Stillerがスイスの獄中で思い浮かべるのは遠いメキシコのチワワ州の砂漠であり、アメリカで過ごした日々である。彼は、異国での冒険に満ちた、自由で、奔放で、活動的な日々を懐かしみ、Knobelに語って聞かせるのである。

このカールズバッド洞窟での物語である「4番目の殺人」は、7冊のノートで構成されている第1部で、その3番目のノートの中で記されている。この小説全体の中では比較的早い段階で記述されているが、この挿話はFrischが独自に発想して記述したものではない。Frischは約1年間アメリカに滞在していた時、つまり1950年にニュー・メキシコ州にあるカールズバッド洞窟群国立公園を訪れたのである。

カールズバッド洞窟群国立公園は、未だにその全容は解明されていない。ニューメキシコ州南のグアダループ山脈に位置し、面積約189km<sup>2</sup>、83の洞窟があり、その中のレチュギア・ケイブは地下489メートルに位置し全米最深で、洞穴の長さは203キロメートルにも達し、世界第5位の石灰岩洞窟である。この洞穴には多数のコウモリが生息している。現在ではエレベーターで地下エリアの中心部まで入れ、観光客は自由に見物できるが、一般に開放されているのは全体の一部のみである。1995年12月6日世界遺産の自然遺産に登録された。公園の約3分の2は自然保護区域に指定されている。この洞窟の探検者と言われているのがJames Larkin Whiteである。<sup>19)</sup> Stillerが詐称する„White“とはまさにこの洞穴の探検者に他ならない。この人物こそ、カールズバッド鍾乳洞群洞穴を最初に探検したカウ

ボーイで、実在した人物なのである。しかし厳密に言えば、Jim Whiteはこの洞窟の最初の発見者ではない。なぜなら、先住民が書いたと思われる洞窟壁画が入り口付近には残っていたからである。さらに、洞窟を探検していた時、そこに行き倒れていた人間の骸骨を発見したのである。つまり彼以前にもこの洞窟の存在を確認した人間が既にいたのである。しかしJim Whiteは偶然見つけたこの洞窟に魅せられたのである。Jimは厳密な意味での最初の発見者ではないであろうが、このカールズバッド洞窟を世に知らしめたという意味で、この洞窟の発見者と認定されているのである。Jimは仲間にその洞窟の話をしたが、この話を信じる者はいなかった。信じさせるには証拠となるものを提示する必要があったのである。紆余曲折を経て、彼は写真を提示することまでこぎつけ、この洞窟を認知してもらうことに至ったのである。

この実在したJames Larkin Whiteは、1882年7月11日にテキサス州のメーソンの牧場で生まれた。根っからのカウボーイであった彼は、子供のころから牛に囲まれて育ち、10歳のころにはもう馬を乗りこなしていた。勉強するよりも馬に乗る方が優先で、テキサスの様々な牧場で働いたのである。その後1892年に、洞窟の入り口から3マイルほどのところにあったジョンとダン・ルーカスの牧場で働いていたのである。そしてこの牧場で働いていた時に洞窟を発見することになるのである。

未だに探検し尽くされていないこのカールズバッド洞窟群はパークレンジャーや洞窟探検家のチームなどによってさらに探検されている。その後1923年カールズバッド洞窟は国立公園に指定され、1925年Jim Whiteは最初の公園案内責任者となったのである。Jim Whiteは1932年に小冊子売り出した。たくさんの挿絵があるこの小冊子は „Jim White's Own Story The Discovery and History of Carlsbad Caverns“ というタイトルであったが、子供のころから牧場で働いていたJimはほとんど教育を受けておらず、識字に疎く、この小冊子はゴーストライター、つまりジャーナリストであるFrank Ernest Nicholson が執筆したものだという。<sup>20)</sup> この小冊子はJim自身が洞窟で販売していたが、彼はブライト病と冠状動脈血栓の病で1946年4月28日、63歳で没している。

Frischがこの洞窟を訪れたのは1951年のことであり、この時既にJames Larkin Whiteは亡くなっていたが、息子のJames Larkin White Jr. が父親の伝記を販売していたので、Frischはそれを手に入れ「4番目の殺人」の発想を得たのであろうことは容易に推測できる。Frischは非スイスのこと、とりわけアメリカ西部の開拓者精神に憧憬を抱いていた。その精神を具現したカウボーイ、それこそがアメリカに思い描いていた一つのイメージだったのである。彼はこの伝記にいわば飛びついたのである。つまり、そこに描かれたカウボーイの生活の一端に触れ、すぐに創作意欲が強い刺激を受けたのである。そしてこのJimの物語を借用しFrisch風書き変えたのである。より具体的には、Jim Whiteの小冊子のほぼ前半の部分を取り上げ、Whiteとメキシカン・キッドの洞窟探検を同名の二人のJimの探検として描きなおした。これは短い分量ではあったが、Frischの全作品の中で最も優れた短編作品となった。それは冒険物語というよりも、自己到達への激しい道のりの描写とも言うべきかもしれない。その当時Frischはこの物語をどのように役立てるか、などは深く考えることもなく、ともかくもこの挿話を自分風に書き上げたのである。そして

これは「4番目の殺人」として小説 „Stiller“ の中に挿入された。この殺人が4番目となっているのは、Frischがアメリカで書き溜めた原稿を „Stiller“ という小説の中で並べた時に殺人の順番として4番目になったということであり、その順序に特別な意味はないと思われる。

## 5 Jim Whiteの „Own Story“

Frischが手に入れたJim Whiteの „Own Story“ によると、カウボーイである彼が迷い牛を探して馬を走らせていたとき、砂漠の丘から夕暮れの空に数百万のコウモリの群れが飛び立つのを見た。まるで火山の爆発か、竜巻のように思えたという。彼は近くの木に馬をつなぎ、藪を通過して地面に大きく開いた洞窟を発見した。そして彼の幼少期の簡単な紹介が続くのである。その数日後彼は灯油ランタン、いくつかのロープ、ワイヤーなどを持ち、斧で低木を切り梯子を組み立て、ある程度の準備をして2度目の洞穴探検をし、洞窟に下りてその内部を探った。そこで彼は洞窟の様々な鍾乳洞群の存在を確認したのである。そして牧場に戻り仲間のカウボーイ達に話したものの誰一人として興味を持つ者はいなかった。この牧場には15歳位のメキシコ人の子供が働いていた。Whiteはその子の正しい年齢も、本当の名前すらも知らなかった。仲間たちはこの子を単に „Kid“ と呼んでいた。この子は英語もほとんどできなかったが、彼のところに来て、チャンスが欲しいと伝えたのである。同行する仲間を見つけられず、一人で行くことには不安だったWhiteはこのメキシカン・キッドを連れていくことにしたのである。したがってこのメキシカン・キッドについては名前され知られていない。そしてその5日後、彼はこの少年と共に、3日間の洞窟探検をしたのである。Jimとこの少年の二人は、手作りのトーチ、燃料の灯油、食料、飲料などを持って、洞窟の中に深く入っていった。無事に生還できるように丸めた細いひもを伸ばしながら進んでいったが、そのひもはまるで大きなボールのようであったという。Jim Whiteは鍾乳石や石筍などが無数に存在する洞窟内の多くの部屋に名前を付けて行ったが、その中で最も大きな部屋はビッグルームと名付けられている。また、王妃の間と呼ばれる部屋では探検の最中Jimのランタンが消え、30分以上も暗闇の中に閉じ込められたりしたのである。そして彼らは薄暗い洞窟の中で灯油トーチを灯しながら進んでいったが、巨大な石筍に着くまで、子供は怖がっていた。そして3日目に岩の引っ張り腰をおろして休んだ時、暗がりを通して一人の男の頭蓋骨を見たのである。トーチを照らしてそのままその男の全身骨格があったのを確認した。Whiteは脚の骨の1つを拾おうとしたが、それに手を触れた瞬間、彼の指で砕けてしまったのである。このスケルトンになってしまった人間は恐らくインディアンで、好奇心から、洞窟に迷い込んでいたのであろうと思われたが、洞窟の中にはインディアンたちの居住していた痕跡は皆無であった。さらに3日目の午後のことだった。Whiteはトーチ用のオイルを持っていた。それは1ガロン缶に入れ、あら布の袋で肩から吊るしてあった。それが漏れ出して、着ていた服がオイルだらけになってしまったのである。背中が痛み出すまでさほど時間はかからなかった。しかし、彼の後ろにいたメキシカン・キッドが持っていたトーチを彼に近づけすぎたため、彼の洋服が燃

えだし、背中のガロン缶も燃えだしそうになった。彼らは出口までを照らすべきトーチのオイルをもはや十分持っていなかった。この時点で入り口まで少なくともまだ3マイルはあったのである。オイル缶の炎で彼が窒息しそうになって、その缶が爆発しないよう願っていた時、その子は彼の背中の火を消そうと夢中だった。まもなく火を消すことはできたが、後ろ側の頭髮は焼け、両手も腕も火傷をし、痛みが酷かった。しかし背中に大やけどを負いながらも二人は生きて生還したのである。

## 6 Frischの「4番目の殺人」

Frisch独自の洞窟の物語である「4番目の殺人」は、未決囚Whiteが看守Knobelに語って聞かせる話である。それによると、自称Whiteがテキサスでカウボーイをしていた頃とされている。彼は一人草原で馬を駆っていた。そして馬を灌木につないで水を探していた時、大きな岩の裂け目を発見したのである。その洞窟に入ろうかと思ったとき石が足元から落ちて音を響かせながら消えていった。恐怖にとらわれて牧場に帰り着いたが、何週間か過ぎてカンテラや投げ縄や、食料などを準備して出かけたとき、夕刻に地面から湧き出るような蝙蝠の群れを見たのである。彼は一人で洞窟の中に下りて行った。カンテラの煤で印をつけながら、カンテラの明かりを頼りに洞窟の底へ底へと下りて行ったが、まだまだ底へはたどり着かなかった。突然カンテラの光の下に人間の骸骨が現れたのである。おさえていた恐怖が一気に爆発したが、その時まで限りある光源である帰りのカンテラのことをすっかり忘れてしまっていたことに気が付いたのである。恐らくその骸骨は救い主だったかもしれない。地上に戻ったとき、外は夕暮れで、何事もなかったかのようにであった。牧場に戻ると、同僚のJimに話したが、なかなか信用しなかった。洞窟は一つを過ぎててもその先にはまた次の洞窟が続いており、終わりはないのだ。それにもかかわらずさらに先へと引き込まれる。洞窟にはあらゆる形の鍾乳石や石筍があり、かつて人間が想像した形体はほとんどすべて化石化されて、永遠に保存されている。まるで大理石のジャングル、しかしこれらもまた完成して消滅していく運命にあるのである。次の時は同僚のJimと二人で出かけたのである。互いに助け合うこともできるし、燃料や食料、ロープなど準備も整えて、洞窟を地下深く奥へと進んだが、その3日目、ちょうど67時間目に事故が起こった。相棒のJimが滑って、2、3メートル下に落ち、うめき声をあげ、投げ縄で身を確保していなかったお前のせいだ、と咎めたのである。しかしそれは無理なことだった。自分の方が先を言っていたし、Jimよりも危険な状態だったから、自分の身の安全は完全に彼がやるべきだったのだ。神経が張りつめていたからすぐに罵り合ったが、すぐにまた和解した。Jimは左足の骨を折ったようだった。Jimは傷ついたJimを慰め、ブランデーを飲ませて、どうしたらよいものかと考えた。よじ登ったりすることなく前進するだけなら彼を連れていくことはできるだろう。つまり、高い所へは、つまり地上には行けるはずはなかったが、何とかしてお前をきつと地上へ引き上げてやるからな、と言ってやった。彼の足を調べて、ブランデーで手当てした。恐らく骨折しているのではなく、くじただけの様だった。苦痛にもかかわらずJimはすぐにまたブーツを履くことに固執した。彼は、突然

見殺しにされることを本気で恐れていたのだろうか。二人ともここまでほとんど眠っていなかった。Jimは全く理性的な計画を立てた。まず燃料を節約するためにカンテラを消して2、3時間眠る。それから新しい力で帰路に着く。帰りは傷ついたJimにとって苦しいことになるだろうし、Jimにとっても疲れ果てることになるだろうから。食料はまだ3日間分あったが、明かりは難しくなっていた。Jimがカンテラを消すのを拒んだので2度目の喧嘩が始まった。1時間ごとに燃料が貴重なものとなっていく。お前が今理性的にならないと我々は取り返しがつかなくなってしまう、と言ったら、Jimは、ブランデーを俺に飲ませて俺が眠ったら一人で逃げようっていうんだなと言う。そんな気はなかったから言われたJimは笑い出した。そんな気はまだなかったのだ。2、3時間後、お互いに眠らず、寒さに震えているばかりだったので、それじゃ行こう、上へ登ろう、とJimは言った。彼の腕を自分の首に回して、痛みを我慢しながら進みだした。片足を引きずってJimは進んだが、カンテラや食料や投げ縄などを放棄することはなかった。二人は期待した以上に前進することができたが、並んで行くことができないところでJimは四つん這いになってついてきた。逃げて行ってしまうのではないかというJimの絶えない不安を考慮して、いつも彼に先を行かせた。そして二人のJimの生き残るための戦いが繰り広げられる。真っ暗闇の洞窟の中で光源を確保するためのカンテラと燃料、生命を維持するための食料、それをそれぞれが片方ずつ持っていた。ある時はあふれる友情に互いの身を案じ、またあるときは片方が出し抜いたり、一人だけ逃げてしまうのを警戒するように神経を鋭敏にして、互いにすきをうかがう緊張状態が続くのである。片方がもう片方を絶えず感動させ、それはブランコのように交代する。互いに相手を牽制しながら、互いに譲らず、片方のJimは両手に傷を負い、もう一人のJimは結局足が骨折していたのだ。この地下深い所から部分的にはほぼ直角の部分さえある岩壁を上って地上に出ることは困難を極めるのである。一人でさえやっとの思いでしか抜け出られないところを骨折したJimを抱えて脱出することは無理なことだった。そして行き倒れていたあの骸骨をまた見たときに二人のJimに残っていたのはただ一つ、握りこぶしでの戦いだけだった。友人同士による殺人的な格闘だった。ぞっとするような、しかしほんの短い間だった。なぜなら最初に足を滑らせた方が暗黒の深淵の中に落ちていき、粉々になり、永遠に沈黙してしまったのである。地上に帰還したのは一人のJimだけだった。

## 7 二つの洞窟物語

Jim Whiteの小冊子を読んでFrischはその物語を借用して独自の洞窟物語を創作した。

この„Jim White's Own Story“は大量に売られている図解付きの冊子であり、広く世に知られている。Frischは手に入れた冊子で読み知った話を自分風にアレンジし、彼の言葉で再現しているのである。彼はこの挿話に„Stiller“という小説の逃亡と帰還の核心部分を織り込んでいるのである。

Frischのこの物語についてきわめて興味深い論文をAndreas Kilcherは„Neue Züricher Zeitung“（以下NZZと略記する）の文芸欄に寄稿した。<sup>21)</sup> NZZはチューリヒにとどまら

ず、全スイスで最も権威のある新聞であり、Max Frischとも関わりが深かった。そもそもFrischの原稿を初めて記事として取り上げたのがこのNZZであり、その後彼は定期的に記事を執筆し、1933年22歳の時にはNZZの通信員としてプラハで行われたアイスホッケー世界選手権を取材した。また1935年には5月に『ドイツ旅行記』、9月に『ある兵士の日記』をそれぞれ3回シリーズで、1948年には『ベルリン・ウイーン スケッチ』を掲載するなど、そのかわりは極めて深い。したがって、この新聞に掲載されるFrischに関わる記事は極めて説得力のあるものに限られるのである。

そもそもJim Whiteは彼自身のサイン入りで自伝を売り出していたのである。1937年からは彼自身が、洞窟の中で売ったのである。Kircherは強く主張しているが、最も信憑性が約束されたこの自伝はしかし実際には彼自身によって書かれたのではなかった、つまり本当の彼自身の物語ではなかった。上述のようにWhiteは識字に疎かったのであり、本人が記述するのは無理な話であった。実は一人のゴーストライター、つまりジャーナリストであるFrank Ernest Nicholsonの手によるものなのである。彼は1929年New York Timesからの依頼で、カールズバッド探検を企て、その際におそらく物語られてはいたが、ほとんど書かれていないカウボーイの話を物語形式に仕上げたのである。つまり、Jim Whiteの物語は真実なのか、それとも事実と反するのかがKircherの最も興味を抱く点なのである。彼の主張の中にある、物語の失われた信憑性と独創性は、FrischのStillerにとっても、この冒険物語そのものと同様重要なのであるという主張である。つまり彼はこの物語におけるFrischの独自性の程度を問題視しているのである。確かに、物語を借用している以上そこに類似性が散見されるのはある程度やむを得ない。Stillerの洞穴の物語のたいていの要素は „Jim White's Own Story“ に由来している。つまり、コウモリの群れ、洞窟の発見、宝物の幻想、洞穴の壮大さと不気味さの描写、同伴者を連れての2度目の探検、予期せぬ出来事、そして牧場でのカウボーイたちの不信などである。

Kircherの指摘は鋭い。彼は作中に見られるFrischの独創性にその文学的価値が存在すると主張しているのである。確かにこの指摘は傾聴に値するであろう。

ではその原典とFrischの物語の相違はどのような点に存するであろうか。まず、Jimとメキシコの少年が、二人のJimに置き換えられている。Whiteとメキシコの少年はいわば主従関係であったが、二人のJimは対等のかかわりであった。Whiteが背中にやけどを負ったアクシデントが、片方のJimが足を滑らせて骨折したことになり、その後の二人は対立関係になっている。Jim Whiteと少年が火傷の件はあっても無事帰還したのに対し、片方のJimは奈落の底に沈み、一人のJimしか帰還しなかった、などが挙げられる。そしてそれらの中で最も大きい相違点は二人で洞窟に入ったJimのうち一人しか帰還しなかった、という点にあると思われる。これらの点からFrischの洞窟の物語は単なる模倣ではなく、原点をヒントにした豊かな空想の生産物だと言えるであろう。

Frischの物語では表面的な冒険ばかりではなく、Whiteの内面の物語が意味を持っているのである。つまりFrischの物語では、二人のJimが生きるという一つの希望に向かってせめぎ合う。一方には光源を確保するカンテラと燃料があり、他方には食料がある。しかし片方だけではならず、お互いを牽制しあう。一方は足を骨折し、他方は両手を傷つけて

いる。シーソーのように交互に訪れる友情と憎しみの感情、しかし油断をしたならばすべてを奪われてしまう。最終的には暴力的な決着。一人は永遠に消滅し、勝ち残った一人だけが地上に生還する。この洞窟の体験によって結果的にはそれまでのStillerから新しい人間への変身が行われる。心の両端を象徴的に演じるこの二人のJimは伝統的なドッペルゲンガーの手法で見事に描き出されている。生命の危険を冒して壮大な地底の世界へと入っていくドッペルゲンガー、つまりJimとJimは相克する暗闇の中で妥協のない戦いを繰り広げ、片方のJimが勝ち抜き、そして変身して洞穴から帰還するのである。洞穴の中でStillerからWhiteへの変身が描かれる点がこの小説全体の核心部分であろう。ここに失踪したStillerがWhiteと自称し帰郷することが可能となるのである。

Walter Schmitzによれば、Frisch自身は次のように語っている。

「この進展を劇的に誇張するために、これが一種の紀行文となってしまうように、私は二人の戦いのこの物語をとにかく創作したのです。今この物語に与えられている意味のすべてが間違いではありませんが、それを私は自覚していませんでした。いずれにせよ、そんなふう中断した原稿には書いてあったのです。私はいまや小説のために、ただ何かある物語を、StillerがKnobelに語って聞かせる物語を必要としていたのです。そこで私はともかくも私が持っているものを利用したのです。私がそれを利用したということは、もちろんまた今度も偶然ではありません。そこには無意識が手伝っていたのです。」<sup>22)</sup>

これはFrischがアメリカで書き溜めた原稿の中からこの物語を取り出して „Stiller“ の中に取り入れた経緯を語っている。しかし、アメリカでの膨大な原稿のかなりの部分が一つの小説にまとめることに気付いた時点で、この短編小説がStillerという作品の中核をなすと気が付いたのに相違ない。この体験があって初めてStillerは自分自身を克服することが可能となり、スイスへと帰還するのである。そしてそれぞれの原稿が一つのテーマの下で関連性を持つことが可能になり、Stillerという長編小説の骨格が見えてきたのである。そしてその際忘れてならないのが名伯楽Peter Suhrkampの適切なアドバイスとそれを誠実に受け入れたFrischの謙虚な姿勢であった。

この洞窟の物語が小説全体を通して貫かれている「同一」のテーマに直結していると多くの批評家たちが指摘してきた。だが、Frischの次の言葉は批評家たちのみならず、ほとんどの読者を驚愕させるに違いない。つまりFrischは次のようにSchmitzに語っているのである。

「私は、それを書いている間中、この本の本来のテーマを意識していなかった、と明確に思っています。そもそも物語る材料が、つまりストーリーが私の興味を引いたのです。そして私が突然 - それはむしろ偶然で、思いつきと呼ばれるものなのでしょうが、(書き溜めてあった原稿を) 一列に並べてみようかなと思ったのです。この思いつきそのものが意味するところのものを、私は意識していませんでした。私はそれを分析もしませんでした。この本が印刷されそして『同一性』について問題にされた時に初めて、この本の中ではもちろんどこにもないこの言葉が意識されたのです。それは勿論幸運なケースでした。なぜならそうでなければ私は一つのテーマを扱っ

て故意に書き続けていたことでありましょう。」

Frischのこの言葉は果たして額面通りに受け止めるべきなのか。このFrischの言葉に対し批評家たちはどのような感想を抱いたのであろうか。Frischは深く意図してこの物語に同一の問題を組み入れたのではないというニュアンスの証言をしている。だが無意識のうちにFrischはこの小説のテーマに沿った形にこの物語を創作しているのである。彼は「この本が印刷されそして『同一性』について問題にされた時に初めて、この本の中ではもちろんどこにもないこの言葉が意識されたのです」と述べているが、この言葉は厳密には正しくないのである。「同一性」とはドイツ語で „Identität“ であり、作者Frischはどこにもこの言葉を使っていないと語っているが、„Stiller“ を詳細に検討してみると、実は次の言葉の中で „identisch“ という単語を使用しているのである。

「すべては人生という言葉で我々が何を理解しているかにかかっています！ 本当の人生、何か生き生きしたものの中で熟成する、色あせたアルバムの中ばかりではなく、素晴らしいものである必要もない、歴史的なものでも、忘れがたいものでもない、……本当の人生、そしてそれはひっそりと目立たぬ母親の人生であるかもしれないし、偉大な創立者の、世界史に留まるような思想家の人生かもしれない。それは我々の重要さで決まるものではない、と思います。人生が本当に人生であったというのは、言い難いがそこにかかっています。私はそれを現実と名づけていますが、しかしなんと名づけたらいいものか！ こうも言えるかもしれません、ある人が自分自身と同一 („identisch“) すると。そうでなければその人は生きたことにはならないのです！・・・」<sup>23)</sup>

Frischは思い違いをしていたようであるが、上記の文の中で同一 „identisch“ という言葉を確認に用いていたのである。Jürgen H. Petersenは「このような膨大で、複雑に組み立てられた小説がすくなくともその中心テーマに関して言葉で表現する前に作家の念頭になかったということは想像しにくい」と記している。<sup>24)</sup> この指摘は首肯しうる。このことはこの作品の核心が「同一」への努力にあったことと、そのテーマを彼が執筆中に意識していなかったとするならば、少なくとも漠然とした「同一」の思いを抱いてこの作品を創作したと推論できるのである。この作品でFrischが訴えようとしたことの重要な点は、自分の人生を真に価値あるものとするには同一への試みと努力が不可欠なのであるということであろう。人生が唯一のものであり、掛け替えのないものであればこそその意識はさらに大切である。そしてその試みの結果人生がどのような形になろうともその行程こそが生きた証なのである。

洞窟の話聞いた看守Knobelの「あなたが、いったいそのJim Whiteなのですか」という問いかけに対して「いや、そうじゃないよ！ だけど私自身が体験したのは、ほら、まさにそれと同じことだった — そのとおりであったよ」と自称Whiteは答えている。Andreas KircherはKnobelの問いかけを「素朴な読者の問いかけでもある」と指摘している。<sup>25)</sup> 実はこのやり取りの中には厳密に言えば矛盾した点が見られるのである。Jim Whiteと自称している語り手が、「あなたが、いったいそのJim Whiteなのですか」と単刀直入に尋ねられてそれを否定している点である。つまり、自分はJim Whiteではないと

答えている点である。このことは物語っているWhiteとJim Whiteは別人であることを自ら告白しているのと同じことである。そもそもこれは3番目のノートに記されている話であり、つじつまの合わなさにこのノートを読む検事や弁護士は、実は彼がWhiteではないと告白していることに気が付くことに結びつくべき点である。さらに、もう一人のJimは„Own Story“にあるように「メキシコ人の少年」に戻っている点である。<sup>26)</sup>確かにこのメキシカン・キッドのその後は不明の様であるが、もう一人のJim同様その行方は杳として知れず、二度と名乗り出てくることはなかったのである。そして相克の時を経て、一人のJimが地上に帰還した時、Stillerの迷いは消え、自分をWhiteと称し、帰国することに至るのである。

## 8 結び

2部で構成されているこの小説の第1部では、失踪した一人の男が、そもそも他のものをもつことなどできないこのたった一つの人生から逃げ去ることはできない、という経験に強いられて外国人として、外国人の名前でチューリヒに帰ってくるが、スパイの嫌疑がかかっているAnatol Stillerと酷似しているために逮捕される。彼を待ち受けている古い像、主観的には死んでしまったものであるはずの過去の像に対する新たな防御、不全であった以前の人生との避けられない合体、そして結局、荒々しい反抗、本当の自分自身を誰にも承服させられないという助けのない苦しみなどが詳細に描かれ、最後には、自称Whiteは失踪したStillerと同一人物である、という法的判断が下される。

そしてそれに続く第2部では、追い詰められた精神状態から解放されたStillerが妻のJulikaと共にジュネーブ湖畔に住み、そしてその妻の死を体験し、ひっそりと孤独な生活をおくることが彼の友人となっていた検事によって報告されるのである。その中で、Stillerが検事Rolfに言った言葉である「もう一度この世に生まれてくることはできない」<sup>27)</sup>という簡単な事実がStillerの苦悩を言い表しているように思えるのである。人生を大切に思えばこそ、疎かにはできない。ここでは人間の根源的な生が根本問題として描かれている。人間にとっては何よりもまず生きることそのものが何ものにも凌駕するという極めて原始的な問題が究極的に示されている。すべての苦悩、迷い、高みへの望み、その他もろもろは生きていればこそであり、生きることはあらゆることがらに優先するのである。

「4番目の殺人」として描きだされたのは、同じ名前の二人のJimという男達の洞窟での壮絶な物語である。そこでは一人の人間の心の中に潜む二つの相反する心理がそれぞれJimという同じ名前を与えられて描き出されているのである。そこにこの小説の最も重要な意図が潜んでいる。つまり、この物語全体が、Doppelgängerのテーマで貫かれているのである。自分自身と祖国スイスを肯定する自分と、それを否定しようとする自分、そこに尽きない彼の悩みがある。列強国に囲まれた小国スイスとそこに生まれ育った自分、その宿命は受け入れざるを得ない、しかし精神性までが小さくなり、そこに発展性が認められなくなることは決して容認できない。二人が争いの最後で見た得体のしれない骸骨、そこにDoppelgängerの相反する心が破滅した場合の一つの結論が示されている。骸骨とい

う結論に至らないためにはどちらかの心が他方を凌駕しなければならない。Stillerにとって両者共存はありえないのであり、結論の先延ばし以外の何ものでもない。生きるためには、一つ先の人生に飛躍するためには心の決着が必要であった。その葛藤の経緯は、食料とカンテラの争奪に比喻されている。カールズバッドの暗い洞窟の中で繰り返される二人のJimの戦いは生と死を賭した壮絶な争いだったのである。したがって、敗者は葬られる以外なかったのである。二人が共に生き残ることはあり得ず、生き残るのは勝者ただ一人なのである。死んでしまえばすべては終わる。

„Stiller“の中で描かれたアメリカでの荒々しい原体験は生きる意味そのものを問いかけている。それはStillerの場合スイスでは決して体験しえないものである。したがって、そのアメリカの描写と対照的に描き出されるスイス、あるいはスイスで繰り返される、妻Julikaとのいさかみや、検事Rolfとその妻Sybilleとのかかわりなどの描写を比較すればその違いは歴然としていて、対照的である。そこで描かれているスイスでの事柄は些末なことに終始し、あまりにもささいなこと連続、感情の行き違い、思いやりの噛み合わなさ、細かいことへのこだわりなどが綿々と描かれ、迷路の中に入り込んで出口を失ってしまったかのような人間模様がこれでもかとばかりに描かれている。それぞれの描写は、その二つを対比させるために特徴づけられ、相対立するものとして描きだされている。

Stillerが自分をWhiteと称して別な人間を装うという行為はなぜ実らなかったのか、それはそもそもの発想にあった。Stillerは他の人間になろうと試みるのではなく、自己を発展させようと試みなければならなかったのである。したがって、かつてのアトリエに連れて行かれ、過去の自分の作品と対峙した時、自分は自分であるという紛れもない事実を認識させられ、これ以上同一性を否認することを断念する。彼は自分自身から永遠に逃れられないことに気づくのである。

この小説の最後は、Stillerが一人ぼっちで生きていくという検事Rolfの報告で閉じられている。その後のStillerの人生は示されず、読者の想像に委ねられている。つまり、作者FrischがStillerの人生を描き出すことによって示そうとした問題は一人一人の読者が自分自身の問題として受け止めるべきなのである。

---

## 〔注〕

- 1) Stiller : S.375.
- 2) S.361.
- 3) S.505.
- 4) Hage : S.63f.
- 5) S.467.
- 6) S.401.
- 7) S.476f.
- 8) S.376f.
- 9) S.377f.

- 10) S.402f.
- 11) S.506f.
- 12) S.725f.
- 13) S.725.
- 14) S.666f.
- 15) S.420f.
- 16) S.412.
- 17) S.590f.
- 18) S.376.
- 19) S.505.
- 20) カールズバッドの鍾乳洞にまつわる事柄については、カールズバッド洞窟群国立公園のホームページ ([www.nps.gov/cave/index.htm](http://www.nps.gov/cave/index.htm)), また英語版並びに日本語版のWikipedia ([en.wikipedia.org/wiki/Carlsbad\\_Caverns\\_National\\_Park](http://en.wikipedia.org/wiki/Carlsbad_Caverns_National_Park)) (カールズバッド洞窟群国立公園[ja.wikipedia.org/wiki/](http://ja.wikipedia.org/wiki/)) なども参考にした。なお、日本語版では2010年以降世界遺産の項が増やされた以外は2018年現時点までほとんどその内容に変化はない。
- 21) Andreas Kilcher はETH Zürichの教授であり、Princeton, Stanfordなどの客員教授を歴任し、NZZのフリーの寄稿者にして、ETHにあるThomas-Mann文書保管所の責任者でもある。
- 22) Schmitz : S.31f.
- 23) S.417f.
- 24) Petersen : S.22f.
- 25) Andreas Kircher : „die auch die Frage des naiven Lesers ist“
- 26) S.521.
- 27) S.767.

### [参考文献]

- Max Frisch : Gesammelte Werke in zeitlicher Folge, Sechs Bände. hrsg. von Hans Meyer unter Mitwirkung von Walter Schmitz. Erste Auflage. Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1976.
- Jim White : Jim White's Own Story, The Discovery and History of Carlsbad Caverns. Bienek, Horst : Werkstattgespräche mit Schriftstellern. dtv 291, Carl Hanser Verlag, München, 1962.
- Hage, Volker : Max Frisch. rororo 321. 9. Auflage, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg, 1993.
- Kilcher, Andreas : Die Abenteuer des Cowboys Jim White. in: Neue Züricher Zeitung, 29.12.2011.
- Lüthi, Hans Jürg : Max Frisch. UTB1085. A.Francke Verlag GmbH München, 1981.

- Mayer, Hans : Über Friedlich Dürrenmatt und Max Frisch, Verlag Günter Neske Pfullingen, 1977.
- Petersen, Jürgen H: Max Frisch Stiller, Verlag Moritz Diesterweg GmbH & Co., Frankfurt am Main, 1994.
- Petersen, Klaus - Dietrich: Max Frisch - Bibliographie. In: Über Max Frisch. hrsg. von Thomas Beckermann, editon suhrkamp, 5.Auflage, 1974, Frankfurt am Main.
- Schütt, Julian : Max Frisch Jetzt ist Sehenszeit Briefe, Notate, Dokumente 1943-1963. hrsg. von Julian Schütt. Suhrkamp Verlag. Frankfurt am Main, 1998.
- Schütt, Julian : Max Frisch. Erste Auflage, Suhrkamp Verlag. Berlin, 2011.
- Stäubli, Eduard : Max Frisch. Vierte, unveränderte Auflage, Erker-Verlag, St.Gallen, 1971.
- Waleczek, Lioba : Max Frisch, dtv 31045. Deutscher Taschenbuch Verlag GmbH & Co.KG, München, 2001.
- Walter Schmitz : Zur Entstehung von Max Frischs Roman »Stiller«. In : Materialien zu Max Frisch „Stiller“ Erster Band, hrsg. von Walter Schmitz, Suhrkamp-taschenbuch 419, Frankfurt am Main, 1978.

### (Abstract)

Im Jahr 1954 wurde der Roman „Stiller“ von dem schweizerischen Schriftsteller Max Frisch geschrieben. Im „Stiller“ spielt eine Episode, der vierte Mord in der Grotte, eine wichtigste Rolle. Die Episode kann man auch als eine unabhängige Novelle betrachten. In der Episode hat Frisch Doppelgängermotiv ausgezeichnet gebraucht. Und wie wichtig ist die Szene? Darüber soll hier ausführlich betrachtet werden.